

令和5年度 第11回沖縄県がん診療連携協議会 ベンチマーク部会 議事要旨

開催日時：令和5年10月18日（木）16:00～17:30

場 所：Zoom を利用した Web 会議

出 席：9 名

天野慎介(全国がん患者団体連合会理事長)、新垣真太郎（沖縄県保健医療部健康長寿課がん対策班主任）、有賀拓郎(琉球大学病院診療情報管理センター副センター長)、伊藤ゆり(大阪医科薬科大学研究支援センター医療統計室室長准教授)、埴岡健一(国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科教授)、東尚弘(東京大学公衆衛生学健康医療政策学教授)、平田哲生(琉球大学病院診療情報管理センター長)、増田昌人(琉球大学病院がんセンター長)、伊佐奈々(琉球大学病院がんセンター診療情報管理士)

欠 席：1 名

井岡亜希子(まるレディースクリニック院長)

陪 席：1 名

西佐和子（琉大病院がんセンター事務）

【協議事項】

1. 第2回医療者調査

(1) 基本方針について

増田部会長より、資料 2-1 に基づき、医療者調査基本方針について説明があった。質問数が多い等の様々な意見を踏まえて、埴岡委員より提案があり、協議の上、基本方針に下記①～③を追加及びリライトすることで、了承された。

- ① 目的に「(3) がん診療連携協議会および部会等の活動の評価のための資料」を追加。
- ② 対象に「抽出方法」を追加。
- ③ 作成方針
 - 患者体験調査は中間アウトカムの指標に原則する
 - 「すべての中間アウトカムを医療者調査で評価できるようにする」とあるが、前回の3倍に近い質問数（約60項目）になる。質問数の制限を考慮して、医療者調査がひととき有効であると考えられる質問に絞るといった内容にリライトする。
 - 患者体験調査との対応、患者体験調査で分かった課題の原因に関する情報収集に役立てる観点も加味する。
 - 「答える人に過剰な負担を与えない範囲で出来るだけ幅広く聞く」を追加する。

(2) パイロット調査について

増田部会長より、(A) 35 項目、(B) 60 項目の2つの調査票を作成し、10 人にパイロッ

ト調査をして意見を聞くのはどうか。もしくは、質問数が多すぎるという意見があるので35項目程度の調査票のみを作成するのか、どちらがよいかわめられた。

伊藤委員より、必要な質問は落とすことができないので、A3一枚にこだわらずやってみてはどうか。天野委員より、現場の負担感を重視せざるを得ないので、35項目ぐらいでよいのではないかという意見があった。

東委員より、どうしても60項目あるのであれば一度プレ調査をしてみて、インタビューしてみてはどうかと提案があった。回答者から、この質問って何をいっているのか分からない、どう答えていいのか分からないという意見が出てくると思うので、そういう質問から省いていくというのも一つの手である。例えば「この病院は役割を果たしていますか？」という質問は、回答者が本当に分かって答えているのか。分からずに答えているのであれば、そんなに意味がある質問ではないかもしれない。パイロット調査は、そういった質問を改定して明確にするためにあるので、最終的に60項目は多いと思うが、パイロットで質問を多めにすることは問題ないとのことだった。

埴岡委員より、質問の量については、まずはプレ調査をして、回答者に抵抗がなければ良いという観点もあるのではないか。60項目を聞いてもよいと思うが、我々で決めずに、回答者に意見を聞いてみるとよいのではないかという意見があった。

協議の上、調査票の試案ができたところで10人にパイロット調査をし、インタビューを行うこととなった。

(3) 質問の内容について

- 「あなたはできていますか？」と主観を問う質問はできるだけ避けた方がよい。「知っていますか」というように事実を聞くと答えやすいのではないか。
- 煙草を吸っている患者さんに対して、禁煙に繋げる支援をしているかといった質問はあってもよいが、がんと診断された患者さんに、がんの予防や検診を受けたかどうか、検診を促しているか、といった質問は省く。
- 3つの苦痛「身体的」「精神的」「社会的」のうちのどれに焦点を絞るか。痛みの結果を受けた後の流れが各病院違うため、戸惑わない質問がよい。
- 割合を5段階で問う質問の場合、回答者に負荷がかかると、75%以上の回答が増え、リスクがある質問になる。パイロット調査で、なぜその値を回答したのか、回答者にインタビューをして、思考過程を追ってみるとよい。

2. 第4次沖縄県がん対策推進計画について

3. 次回ベンチマーク部会開催日程について

4. その他

時間の都合上、次回へ持ち越しになった。